



日本社会事業大学同窓会北海道支部【(2015年11月20日発行 第13号】

(事務局・仁木町大江2-457大江学園内 0135-32-3662)

冬の訪れを強く感じるようになった11月7~8日(土・日)、旭川近郊白金温泉において標記を開催しました。両日の参加者は17人ながら、久し振りに参加した同窓生もいて、セミナーそのものは大いに盛り上がりました。

セミナーは、三上副会長(現地実行委員長)の司会で始まり、まずは村上会長が主 催者を代表して挨拶しました。

会長はこの中で、仲村先生を始めとした恩師のご逝去に触れ、社会福祉とは何か、 その労働とはどういうものか、を教えてくれたのが諸先生であったと述べました。また制 度「改正」を、社会福祉の原点に立ち返るべきという「警鐘」と捉えれば、改めて社大 及び卒業生が社会福祉の原点づくりをしていかなければならないことが理解できると強 調しました。

続いて、金子恵美社大教授が「子ども子育て支援法と子ども福祉」と題した講演を行いました。

金子氏はまず、子どもと子育てをめぐる状況として、1. 少子高齢社会、2. 子どもの貧困(社会的排除)、3. 子ども虐待、4. 保育所待機児童を挙げ、今回の制度「改正」では、1と4は強調しているものの、本当に観ておかなければならない背景は2と3であることを指摘しました。

その上で、先進諸外国は家族関係社会支出の割合が高いのに比べ、日本はわずかG DPの1%に過ぎないと述べ、かつ、こうした国々では「両立支援」を行っていることが 特徴であると資料により説明しました。なお両立支援とは、経済的支援と併せて、保育 や育児休業制度を確立していくことを指します。

ユニセフの資料によっても、日本の子どもの貧困率は14.9%に上り、これはOECD 35ヶ国中9番目に高い貧困率となっています。その証として、ひとり親世帯の収入が低く、そうした世帯が孤立化する中で今日の貧困が進行していることを具体的に説明しました。そして、その問題の顕著化が子ども虐待に現れていることを指摘しました。

以下、我が国の制度、政策を概観しつつ、他方、自治体の取組強化が求められていると言います。特に、幼稚園現場でも保育現場でも、「養育と教育」という視点が欠けており、結果、子どもの権利が守られていないことを解明しました。

こうした現状を踏まえ、最後に「介入型ソーシャルワークモデル」を提唱しました。 講演後、参加者との意見交換が行われました。

続いて、今年も参加してくださった伊藤さん(同窓会顧問)が、「社大の現況と課題」 と題した報告をしてくださいました。

この中で伊藤さんは、大学はもっと人間教育をすべきことを強調し、まず社大自身から教育を変えていくべきと提言しました。具体的には、入試制度と入学後の憲法理念に基づく教育の在り方、です。

また、同窓会との関係では、同窓会収入が卒業生のわずか1割に過ぎないことを指摘 し、同窓生の奮起も促しました。

初参加の数間学生支援部長は資料に基づき、社大の現状を説明しつつ、「五味先生や伊藤さんは、いつも学生の方を向いて仕事をしていた」と述懐し、今日の大学全体の動向にも触れつつ、学生支援の取組を説明してくれました。

同窓会との関係でも、その連携強化の必要性を強調していました。

1日目のセレモニー終了後、各人は割当てられた部屋に戻り、風呂などを愉しみました。そして、懇親会に入りました。懇親会の司会は安曇さんです。

参加者等の近況報告等もあり、会は時間が経つにしたがって盛り上がっていったので した。また重要な幾つかのことを決め、新春セミナーで再度協議することとしました。

翌日は、ホテル周辺の名所を見学後、北海道療育園を見学しました。

まずは、課長より療育園についての歴史及び概要についての説明がありました。

北海道療育園は、今年で創立46年を迎える北海道でも老舗の社会福祉法人であり、 現在の定員は336人です。かなり重度の人たちが暮らしています。

法人の基本理念として、1. 健康で文化的な施設づくり、2. 利用者が主人公の施設づくり、3. 利用者を中心においた対応のできる職員の養成、4. 利用者と職員の基本的人権が共に守られる施設運営、5. 地域に根ざした施設づくり、6. 「福祉施設は社会の財産」を基本とし、健全かつ透明な施設運営、の6点を掲げています。

施設内の見学を通じて、随所にこうした理念の反映を観ることができ、職員集団の智慧の結晶が現れていることが実感できました。

見学終了後、参加者は市内の昼食会場に移動し、昼食を摂りながら、次回の開催地について検討しました。この結果、道東ブロックが担当し、釧路で「市民公開セミナー」を行うこととなり、詳細は今後、事務局と連携を取りながら詰めていくこととしました。

会場でも論議は大いに盛り上がり、「社大は全国区でなければ意味がない」、「かつ ての社大の旗を掲げながら、個々の社会福祉現場で頑張っていこう」と誓い合いました。

これにて2015年の秋季セミナーは解散。伊藤さんたちは旭川空港へ、市外からの参加者は現地実行委員の誘導により、各々の地へと戻って行ったのでした。

現地実行委員会のみなさん、とりわけ丸山さん、本当にありがとうございます!



【特別寄稿 2回連続のその2】

元同窓会会長 野村 健さんを偲ぶ -知恵おくれと共に生きるまちづくり-



北海道同窓会前会長 山崎 忠顕

2007年「ヘルシー・ソサエティ賞」を受賞した際のお話。

東宮御所にて5人の受賞者と皇太子殿下が親しく話されたことの内容について、受賞者のお一人で殿下の大学時代同窓生であったという方が、「健さんの話を殿下が大変興味を示されていた」ということを仄聞する機会があった。それは、銀山学園開設後まもなくの頃、夜毎の無断外出をなかなか止めることができず、とうとう地域住宅への物品の損害を与えてしまうことがたびたび起きた。施設存続の危機にもなろうとした時に、野村さんは職員を前にして次のような話をした、というものであった。

「利用者さんが夜毎に無断で外に飛び出すことは、今後施錠を厳重にすることによって外出を阻止することではなく、むしろ外出は人として自然であり、そのことをまず理解したい。今後園の方針として、地域社会の人々と接する機会を可能な限り増やしたい。 具体的には職員が利用者さん達を自宅に招待することをお願いできないか」

これを受け、利用者さん達は年6回、はじめは職員宅へ、やがて徐々に地域住民宅への訪問へと広がっていった。このことによって、利用者さんの無断外出はゼロとなった。

ということの具体的な実践例に関して殿下は、大変興味と関心を示された、とのことであった。やがて銀山学園は、大規模施設として、1996年、開拓地跡から地域の理解者の絶大な協力によって、山を下って銀山市街地に全面移転した。

「地域社会を活性化する中にこそ本来、人間の持つ幸せの原点がある」という哲学ともいうべき実践課題から、健さんは大きく2つの具体的運動を行うことになった。1つは銀山地域の組織的、文化的活性化運動であり、もう1つは、結果として敗れたが地元町長としての「福祉の町づくり」、地方自治体長選への出馬挑戦であった。

青年たちとの語らいの中から、約40年前に健さんが発案した街づくり運動は、今でも 地元で継続されている。1976年「銀山の明日を考え行動する会」、通称「行動の会」 によって銀山祭りは活性化し、銀山文化連盟も位置付いた。また、仁木町社会福祉協議 会会長としての事績としては、社会福祉の基盤づくり等が挙げられる。

さてここで、銀山学園創設期に活躍された同志社大社会学部卒であり、札幌市初の女性ケースワーカーであった健さんの夫人・野村昌子さんについて触れる。夫人は適宜、銀山学園のパート職員として働き、地域の相談、カウンセリング等で活躍され、職員からは「銀山のマザーテレサ」と慕われた。夫人は一貫して職員集団を陰で支え、地域青年達の銀山自宅集会や頻繁な食事会を開催した。他方、多忙な中にあって独学で社会福祉士資格を取得された。文字どおり活躍された1995年の銀山婦人会文芸誌に、そのような忙しい夫人が銀山婦人会に寄稿された一文がある。

【以前、学園の当直をさせていただいていた時、初老を迎えた園生の一人が夜の団らん時、編み物をしながら私に寄り添ってきて、ボソボソとつぶやいた。

「園長先生って優しいね・・」と、「どうして」と聞いたら「はじめて学園に母さんと来た時(開園時の入園者面接の時らしい)、園長先生が母さんに言ったの、"お母さん、今まで大変でございましたね、ご苦労されたことでしょう、もう大丈夫ですよ"と母さんの手を両手で握ってくれたの、そしたら母さんが泣いたの、そして私も泣いちゃった」と目をうるませる。 —それまでの永い年月、障害を持ったこの子を連れて、親と子はどんなにか苦しみ、悩み、苦労したことか—「だって母さんは私をつれて、死のうと思ったことがあったんだもの」と。私は涙がこみあげ、ただその子の手を「よかったね~」といって固く握っていた。

その時私は、わが夫のために、もっともっと頑張らねば、と熱いものがこみあげてきた。私は、今もこの時のことを思うと胸が熱くなる。

それぞれの人の、それぞれの幸せ、あなたにとって幸せって何ですか、どんなささいなことからでも、いつも幸せを見い出せる、そんなみずみずしい感性を、例え身体が不自由になっても、私は加齢と共に失ってはいきたくないと思う。

今日も一日、健康で生かさせていただいたことに感謝しながらー。】

(「幸せって何だ」より)

健さんが目的にし、一生を懸けた「知恵おくれと共に生きるまちづくり」の過程は社会が求めている「障害者と共に生きる」共生社会の実現を目指すことにほかならない。

しかし、大きく違うところは、銀山学園の家庭訪問の実践を通して、地域住民の意識 の変容が認められることである。機会があれば、また別途続きをお知らせしたい。

*なお、「【社会福祉随想リレー】社会福祉法人厚生協会の職員採用の取り組みと課 題」は、次号に「その2」を掲載予定です。お楽しみに!!

- 2016年新春セミナーのご案内 -

恒例の新春セミナー&懇親会は、1月23日(土)に決定しました。詳細は追ってお知らせしますので、現状では日程のみ確保してください。多くの方々のご参加をお待ちしています。

♦♦♦ お知らせです ♦♦♦

- 1. 2016年日社大市民公開セミナー兼道同窓会秋季セミナーは、10月半ばに、釧路で開催することが決定しました。
- 2. 来夏に社大で、「**北海道フェアー**」を実施予定です。 詳細は、大学当局&同窓会事務局等と詰めていきます。

